

日本ユニシス PowerWorkPlace オンラインUCサービス

クラウドPBXで万全のBCP対策をFMCにより回線冗長化も実現

BCP(事業継続計画)における最大のポイントの1つとなっているコミュニケーションインフラの再整備——。日本ユニシスが提供するLyncベースのクラウドPBX「PowerWorkPlace オンラインUCサービス」なら災害時に強く、さらに平常時には社員間のコミュニケーション活性化に貢献する万全のインフラを実現できる。

3.11で得た教訓をどう活かしていくのか。まさに今、日本全国でその教訓を無駄にしないための取り組みが進められているが、BCP(事業継続計画)の観点でとりわけ学ばされたのは次の2点だろう。

1つは、サーバーなどのICTリソースを自社内に保有することのリスクの高さである。震災を契機に、耐震性や電源確保などの面でより優れるクラウドへとICTリソースを移行する動きが加速している。

そして、もう1つはコミュニケーションインフラ、なかでも電話の重要性を再認識させられたことだ。災害などの緊急時には、電話のようなリアルタイムコミュニケーションツールが特に真価を発揮するが、3.11においては長時間にわたり電話がつながりにくい状況が発生。電話の大切さを改めて実感する

こととなった。老朽化やサポート切れしたPBXを使い続ける企業が少なくないなか、震災をきっかけに電話システムの見直しに着手する企業が急増している。

クラウドの活用と電話システムの見直し——。この2つがBCPの重要ポイントとして浮上しているわけだが、そこで注目を集めているのが日本ユニシスの「PowerWorkPlace オンラインUCサービス」(以下、PWPオンライン)だ。

Lyncのフル機能をSaaSで提供 独自の運用管理ポータルも用意

PWPオンラインは、日本マイクロソフトのユニファイドコミュニケーション(UC)製品「Microsoft Lync」をクラウドサービスとして提供するものだ。UCのリーダー的存在であるLyncは、電話、Web会議、IM(インスタントメッ



日本ユニシス
ICTサービスセンター
適用サービス室
プロジェクトマネージャ
牧野陽一氏



日本ユニシス
サービス企画部
サービスビジネス推進室
オフィスコミュニケーション
グループ
主任
杉山陽一朗氏

ージング)、プレゼンス(在席確認)を統合的に実現できるが、これら機能をSaaSで利用できる。

LyncのSaaS版としてはマイクロソフト自身が「Office 365」の中で提供する「Lync Online」もある。しかし、「決定的に違うのは、外線・内線電話の発着信機能が利用できること。つまり、PWPオンラインでは、Lyncのフル機能が使えます」と日本ユニシスの牧野陽一氏は説明する。このためOffice 365と違って、PBXとして活躍できる。

PWPオンラインには「専有型」と「マルチテナント型」の2タイプがあり、現時点で外線・内線電話機能をサポートするのは専有型のみだが、マルチテナント型も近く対応予定となっている。

また、サーバーは国内のデータセンターに設置。加えてインターネットを介さずにイントラネットと直接接続できる

ため、通話品質やセキュリティの面でも安心だ。

日本ユニシス独自の機能として、運用管理ポータル機能をオプション提供しているのも特色である(図表1)。これは、総務部門の方などでも簡単かつ安全に、ユーザーの登録や変更などの作業が行える機能。このため今まで外部に依頼していた電話番号の変更などを自社内で実施することが可能になる。さらに牧野氏は、「Office 365やExchange、SharePointとの連携や一体運用などのお手伝いができるのも、長年マイクロソフト製品を扱ってきた日本ユニシスグループの差別化要素です」と語る。

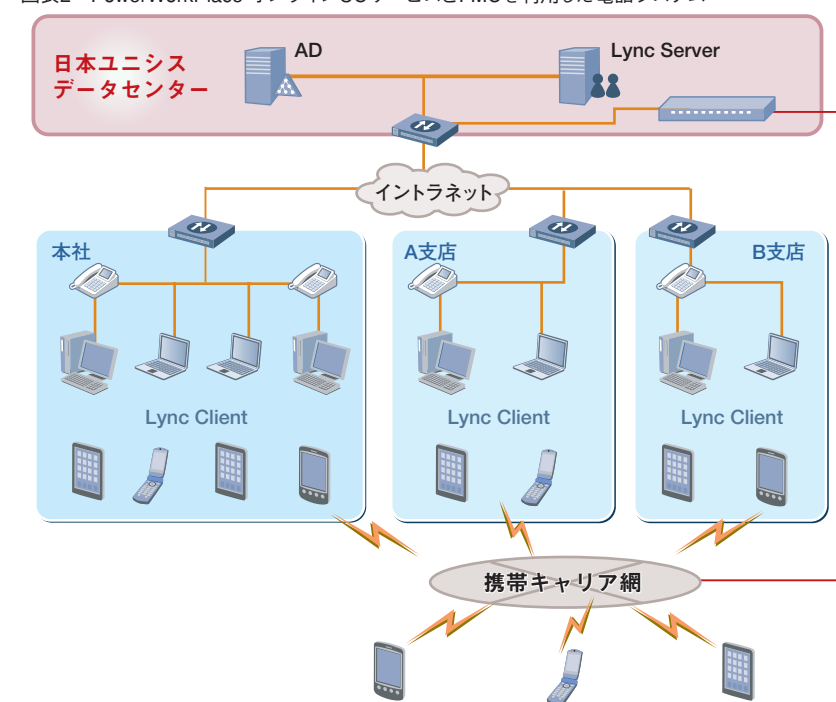
クラウドPBXで“電話”を二重化 FMC併用で4つのメリット

すでにPWPオンラインは、大手通販会社や金融機関など、数多くの企業に導入されているが、日本ユニシスの杉山陽一朗氏によると、既存PBXからの移行だけではなく、次のようなニーズも増えているという。「BCP対策として、電話システムの二重化、三重化を検討する企業が多くなっています。そうした企業では既設PBXはそのままに、追加でPWPオンラインを導入されようとしています」。事業継続のうえで電話は不可欠との認識が高まっている証左といえるだろう。

クラウドPBXの採用は確かに電話システムの耐障害性を大幅に向上させるが、万全を期するためには回線障害への対策も講じる必要がある。そこで日本ユニシスが薦めているのが、PWPオンラインと携帯キャリアのFMC内線サービスの併用だ(図表2)。

FMC内線サービスのメリットは大きく2つ。外出先でも内線の発着信ができることと、通話コストを削減できることだが、BCPにも有効だと杉山氏は話す。「回線の冗長化になるからです」。

図表2 PowerWorkPlace オンラインUCサービスとFMCを利用した電話システム



大規模災害の発生時、万一WANがダウンしても、携帯網が使えれば、外線・内線を継続して利用できる。

また、設備投資コストの抑制にも役立つ。「電話をIP化すると、新たに音声トラフィックも社内ネットワークを流れるようになります。このため社内ネットワークの増強が必要になるケースがありますが、FMCを併用すれば携帯網にトラフィックを迂回させられます」(牧野氏)。FMCによって、回線のダイバーシティ(多様性)を確保できるのだ。

在宅勤務など多様な働き方実現「会社に来るのが楽になった」

このダイバーシティは、PWPオンラインの魅力を深く理解するうえで大事なキーワードの1つとなる。

例えば、働き方の多様性。レガシーPBXは社内ではしか内線が利用できないが、PWPオンラインなら自宅やカフェなどインターネットにつながる環境であれば、どこでも内線を利用できる。すなわちBCPにおける必須項目である在宅勤務にも活用できる。

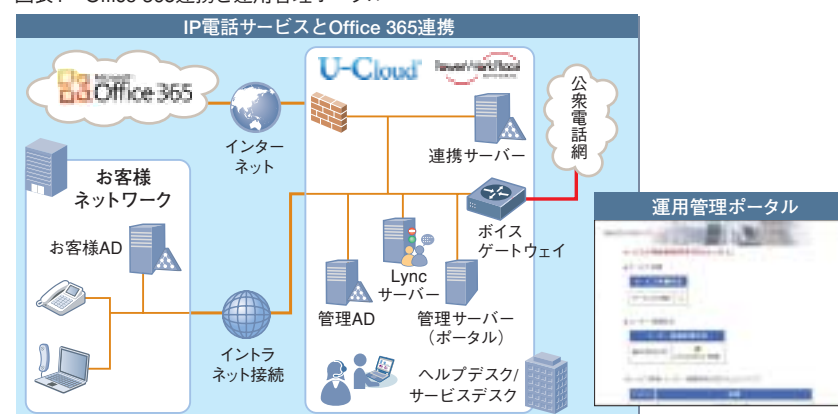
相手の在席情報を確認したうえで、電話／テキスト／ビデオ／資料共有などの多様な手段から最適なコミュニケーション方法を選べるのも特徴だ。その結果、コミュニケーションのスピードアップと活性化がもたらされ、企業競争力の向上に貢献するが、牧野氏によれば、こんな声もユーザー企業からは届いているという。「聴覚に障がいがある方が『会社に来るのが楽になった』と言うそうなのですね。IMを使ってテキストで同僚と気軽に会話できるようになったからです」

BCPにグローバル競争、そして多様な働き方の実現による優秀な人材の確保——。これら企業経営の最も根幹部分を支えるのがコミュニケーションインフラだ。当然その優劣は企業の将来を左右するが、PWPオンラインを選択すれば万全の構えとなる。

お問い合わせ先

日本ユニシス株式会社
URL: <http://pwp.unisys.co.jp/>
「パワーワークプレイス」で検索してください。

図表1 Office 365連携と運用管理ポータル



PWPオンラインのIP電話サービスとOffice 365を連携し、外線・内線の発着信機能を利用することもできる(左)。また、日本ユニシスが独自開発した運用管理ポータルによりサービス状況が一目でわかるのも特徴。ユーザー登録や変更作業を内部で実施できる(右)